
月に似た君

紫條 たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に似た君

【著者名】

紫條 たすく

【ZPDF】

Z0515F

【あらすじ】

月をテーマにしたSSです。月見の夜、意地つ張りで素直じゃないサラリーマン三上の家に年下の恋人優輝がやつて来て繰り広げられる一こま。

仕事が終わって自宅でのんびりしていたら、いきなり「のもーよ。」と「ンビニの袋を両手に、会社の後輩である川上優輝がやつてきた。

俺は「」十日間ほどまともに休みを取つていなくて、今日「」を早く寝ようと思っていたのに、そんなことお構いなしで奴は俺の部屋に上がり込む。

そして、勝手知つたる、とばかりにグラスやら皿やらを出して一人で飲み出した。

……「」は一応、俺の年下の恋人と言つことになつてゐる。

「用つてさ、三上君みたいだよね」

俺のベッドの上で、月見団子を頬張りながら優輝が呟いた。折しも今日は十五夜。嫌みなほどに丸く明るい月が、窓際に置いたベッドの上の優輝を照らす。

「おまえな、ちょっと態度でかすが。」を「」だと思つてゐる「三上君の部屋」

わかつてやつてんのか、お前。しかも開き直つてやがるし。

ベッドの上にうつぶせ寝そべる優輝は、その一八〇センチ近い身長だけでもうつとうしこうのに、更に態度まででかいときている。

「大体俺と用つて似てるつてどういう意味だよ」

「そのまんま。綺麗なぐせに冷たくて、近づきたくても近づけない。」

「ちょっと待て口ヲ、こつ俺がお前に冷たくしたよ?」この家に入れてやつてるだけでも破格の扱いなのに、どういう意味だ。

「こつとも冷たいよ。だつてさ、俺の事好きつて言つてへんないだ。

優輝はこれまで外を向いていた視線を部屋に戻し、体制はつづぶせのまま俺の方へ視線をよこした。

「はあ？ なんつだよそれ」

わけわからぬえ。つていうか、二十歳を超えた男が上目遣いに人を見るのはやめる。ついでに団子の串を振り回すな。

「俺、三上君に毎日毎日好きだつて言つてゐるのに」

いや、それも恥ずかしいからやめてくれ。

「毎回毎回適当に流したり冗談にしちやつたりで、キスとかエッチはおつけーなのになんで”好き”の一言はもらえないわけ？」

「優輝、お前なあ……」

よくもまあそんなことを真顔で言える。言われるこつちはいたたまれなくなつて視線を逸らす。

「用つてさ、さつきから雲の合間で出たり消えたり。絶対近づかせるもんかーつて馬鹿にされてる感じ。三上君だつていつも手が届きそうで届かないの。俺が近づこうとする逃げるんだもん。そつくりじやん」

「いつ俺が逃げたんだよ」

「いつつも。いつつも、だよ」

のそり、と優輝は身体を起こすと、そのまま子供みたに膝を抱える。でかい団体してこのポーズは、なんだか子供っぽくて笑える。

「ガキ。拗ねてんじやねーよ」

「拗ねてない。それにガキじゃない」

優輝は不満そうに頬をふくらませる。ほら、そういう態度がガキだつて言うの。

「そろそろ俺達付き合いだして一年経つのこと、一回も好きつて言つてもらつていないつてどういづつ事？」

そもそも一年間毎日毎日好きだと連呼できるお前の神経構造が、俺は理解できない。

そんな毎日言われなくてもわかつてゐるし、それに俺の気持ちだつて一々言葉にしないとわからないつてなんだよそれ。

キスもセックスも、好きでもない男と出来るような人間だと、お前俺のことそう思つてるわけ？

なんて言葉が舌の先まででかかる。

だけど素直にこんな事言つてしまつのは何か悔しくて、俺は黙つて優輝の顔を見た。

「何か言つてよ。」

視線で訴えてくる優輝。いつもストレートにぶつけられるその愛情に、いつも俺は押され気味だ。

だけどこつちはこつちで年上のプライドとかそんな物が邪魔して、優輝の気持ちに答えたことは一度もない。

こうなつたら、根比べ。俺は負けじと優輝の瞳を真正面から見返した。

数分後。

「はあ……

根負けして、溜め息と共に絡まつた視線を外したのは、優輝の方だった。

「……帰る

ベッドから起きあがると、自分が散らかしたビールの空き缶やグラス、ゴミなどを片づけ出す優輝。

「お前、何しに来たの」

「別に、三上君の顔見に来ただけ」

「会社でも見てるだろ」

我ながら意地の悪い台詞だと思つ。

会社では絶対私情を交えるな、と俺は優輝にきつて言つていた。だからお互い同じフロアにいたつて口をきくことなどほとんど無い。ぴた、優輝の手が止まる。

「わかった」

何がわかったというのか、うつむいた状態の優輝の表情を俺は読むことが出来ない。

「もう来ない」

「……え？」

発せられた言葉の意味が、わからない。

それはつまり別れたいと言つたことなのか、単純にこの部屋以外の所で会おう、と言つ意味なのか。判断がつかないで迷つて居る間に、

片づけを一通り終えた優輝は俺の横を素通りして玄関へ向かう。

「ちよ……つ」

優輝の真意を聞いたくて、俺は慌ててその後を追つ。

このままだと、優輝が一度と俺の所に来なくなりそうな、そんな不安に駆られて。

「優輝」

玄関で革靴を履いている後ろ姿に声をかける。

振り向きはしなかつたけれど、動きは止まつた。

「あ……」

声をかけたはいいけど、その後の台詞が出ない。

来ないつてどういう意味なのか、ただそれだけの簡単なことが聞けない。

だつてこんな形でそんなこと聞いたたら、好きだ別れたくないつて白状してゐるようなもんじやないか。

かける言葉を探して困つてしまつ俺。相変わらず振り向かないその背中に、手を伸ばしかけた時。

「少しば焦つた？」

いきなりぐるりと身を翻した優輝に、その手を掴まれた。

「なつなつ……」

見上げると、少年のような悪戯っぽい目つきで笑つて居る。

「出来るわけ無いじやん、一度と来ないなんて。たとえしつこいつて嫌われたつて、三上君から離れられるなんて出来そうにないのこ」

「おま、何考えて……」

「ん~？」

「いや、と優輝の口の端が上がる。

「なんかねーいつも俺ばっか余裕ないの悔しいから。ちよつと驚

かそうと思つて

二一七一七、二一七一七。

まるで、悪戯が成功して喜んでいる子供のよつたな表情。

「ふつつづづけんなつ！」

からかわれた、そう気付いた俺は怒髪天を衝き、捕まえられていた腕をふりほどくと優輝の顎を思いつきりグーで殴つてやつた。

「いつたあい。三上君ひどいよ~」

顎を押さえて情けない声を出す優輝。

「知るか馬鹿！ 帰れもー帰れー！」

一度とくんなぼけ、と言つて優輝の身体を家から押し出さうとするけれど、体格・腕力共に負けていて。あつという間に抱きしめられてしまつた。

「ねえ、俺のこと好きだよね」

耳元でささやかれる。なんだその妙な自信は。さつきまで拗ねていたのはどこどいつだ。

「こいつ、立ち直るの早すぎ。

これ以上優輝を嬉しがらせたくない、俺は黙り込む。

「黙つてるつて事は肯定つてことで」

勝手に決めつけた優輝は少し腕の力を緩めると、俺の顎を掴んで無理矢理顔をのぞき込んでくる。

「好きだよ」

ちゅ、と触れるだけの軽いキス。

「だからさ、たまには俺の所に降りてきてよね。お月様

誰がお月様じゃ、と心の中で悪態をつきながら、俺は優輝の腕の中で瞳を閉じた。

(後書き)

読んで頂きました。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0515f/>

月に似た君

2010年10月8日15時09分発行